

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22510277

研究課題名(和文) アメリカ先住民の文化再生運動および共同体再生における部族大学の役割と意義

研究課題名(英文) The role and significance of the tribal college in reviving tribal culture and community.

研究代表者

阿部 珠理 (ABE, Juri)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：50184213

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ先住民ラコタ・スー族社会における文化再生および共同体再生において、部族大学が重要な役割を担っていることが明らかになった。その第1は部族社会の諸問題(貧困、疾病、低学歴、家族の紐帯の喪失など)に対処できる有能な人材をそれぞれの対応部署に輩出していることである。ことにそれは小中学校などの教育現場に顕著である。第2にそれら学生の学習継続、動機付けに指導教員が多大な努力を払い、時には個人的な支援が学生を脱落から救っている現実が明白になった。第3に言語維持カリキュラムの作成、儀式の大学における実践など部族大学が文化維持への明白な意志をもち、具体的な実践をしている実態が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The role of tribal college in reviving the tribal culture and community were revealed by this research. The first findings show tribal college by educating and graduating able personals who can effectively work at offices and institutions to deal with various tribal social issues. Secondly it is revealed that in order to keep students from dropping out the tribal college, faculty makes at most effort to keep them motivated. Not only through formal instruction but with moral support which can be quite personal at times encourage the students. Thirdly the tribal college helps to develop the Lakota language curriculum and syllabus to be used not only at college level but at elementary and secondly education. The tribal college also exercise the traditional ceremony and religious rituals on campus. All of these facts prevails that it is certain that the tribal college is serving as a strong and core engine to revive the tribal culture and community.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：文化再生 部族大学 部族コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

アメリカ先住民社会は、500年におよぶ植民地主義の被害者として疲弊した。ことに19世紀後半から強力に押し進められた合衆国の同化政策によって、文化破壊が進行した。部族語の話者は減少してゆき、部族語話者と同化政策世代間の断絶や、伝統的儀式的衰退によっての部族共同体の紐帯が弱められ、先住民アイデンティティはその根拠を失いつつあった。

希薄化する先住民アイデンティティの復活を促したのは、60年代のインディアン・アクティヴィズムであり、先住民は独自の民族復興、復権運動を展開する。この流れの中で民族教育を推進する核として、部族大学が誕生した。

申請者はサウスダコタ州ローズバッド・インディアン保留地に立地するシンテグレシユカ部族大学を調査することによって、部族共同体の再生ならびに文化復興に果たす部族大学の役割と重要性および、部族大学がいかなる方策と実践をもって民族再生、文化再生へ寄与しているかを明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ先住民の文化再生運動および共同体再生における部族大学の役割と意義を明らかにするものである。申請者の20年にわたる調査地であるサウスダコタ州、ローズバッド・インディアン保留地にあるシンテグレシユカ大学を主な調査対象とする。当校は、部族大学としては初めて、合衆国大学認定機構からの認定を受けた教育機関として、現在部族大学のモデルとなっている。当校が民族文化の復興、再生を目指して設立した「ラコタ学部」の教育内容、また地域社会を対象として展開するプログラムやイベントを通して、高等教育機関が文化再生運動、共同体再生に果たしうる役割と地域社会への貢献およびその重要性を検証する。

3. 研究の方法

シンテグレシユカ部族大学の設立経緯、各学部の発足、設立趣旨の策定、カリキュラムの進化など歴史的な事象に関しては、主にシンテグレシユカ大学アーカイブの歴史資料を渉猟した。1970年設立前後の設置準備委員会、大学理事会議事録などにも当たったが、資料は充分ではなく、設立に関わった存命の当時の関係者を割り出しインタビューを行った。大学の部族社会への貢献を明らかにするために、もっとも時間を費やしたのは、教員と卒業生へのインタビューである。人文科学、ビジネス、教育、ヒューマン・サービス、テクノロジー、ラコタ・スタディーズの各学部長、ヒューマン・サービスと教育、ラコタ・スタディーズに関しては、複数の教員

にもインタビューした。卒業生に関しては実際に職に就いている卒業生を調査し、ビジネス4名、教育4名、ヒューマン・サービス5名、ラコタ・スタディーズ3名に、それぞれ1時間～2時間の半構造化インタビューを行なった。インタビューはすべて文字起こし、それら膨大な資料を整理し、分析の途上である。大学がコミュニティのために行う活動やイベントに関しては、それぞれの活動の担当者に面談してその概要と実態を明らかにした。また活動に参加したコミュニティ成員にもインタビューを行い、部族大学とコミュニティ成員の関係性の生成を明らかにした。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

シンテグレシユカ部族大学の設立の経緯において、スタンレー・レッドバード・シニアとジェラルド・モハットが重要な役割を果たしたことがわかった。前者はラコタ部族社会において尊敬を集めた牧場主であり、学歴、教育歴はないが、60年代～70年代の先住民権利回復運動で部族を主導する人物の一人であった。彼は友人の白人学者ジェラルド・モハットとともに大学設置委員会を主導したことが設置委員会議事録、関係者のインタビューから明らかになった。モハットが短期間初代学長を務めたのち、内務省インディアン局で働いていたローズバッド出身者ライオネル・ボルドーが2代目学長としてリクルートされた。ボルドー指名がラコタの宗教儀式を通じて決定された。学校教育という近代的制度においても、部族のスピリチュアリティが重要視された事実は、この社会の特性を表すものである。1970年の設立以降、4年生大学への昇格、教育学部、ヒューマンリソース学部の大学院設置などを達成し、シンテグレシユカグレは、部族大学のフラッグシップ、成功例として位置づけられている。これまでの経緯で顕著なのは、これらの成功が制度の所産というより、レッドバード・シニア、モハット、ボルドーの強力なリーダーシップによって達成されたことである。ボルドーは40年の長くにわたり学長の職にあり、この点に関しては行政停滞と個人への権力集中の観点から批判があることも明らかになった。

教員インタビューは以下の人物に行った。人文科学-リサ・クルッグ、ビジネス-ノラ・アントワン、教育-シェリル・メデアリス、ヒューマン・サービス-シェリル・クライン、ジュリア・ケイヒル、ラッフィ・ネリッティ、テクノロジー-ジム・ポイニー、ラコタ・スタディーズ-アルバート・ホワイトハット、ヴィクター・ドゥヴィル、スタンリー・レッドバード・ジュニア。

インタビューからは以下のことが明らかになった。

教員の教育背景 ほとんどの教員がラコタ社会に顕著な「機能不全家庭」の出身ではないことが分かった。両親あるいは単親がアルコール依存症であるケースが数例あったが、その場合も円満で愛情深い祖父母に育てられていた。親の教育程度は高校-大学卒と、保留地においては相対的に高く、教員の出身家庭は概ね教育に肯定的であり、被験者も進学、教育者就業に関して環境からのエンカレッジメントが大きかったことを認めている。教員の部族大学生徒観 すべての教員が生徒の学力の低さは生得的なものではなく、環境因子によるものだ認識していた。学生の就学継続には物理的条件の整備が必須である。それらは経済的支援(さらなる奨学金制度の設置)、通学手段(スクールバスの増数)の確保、学生の子育て支援(大学託児所設置)である。

教員と生徒の関係 ほとんどの教員は学習指導だけでなく、個人的な相談に応じると答えた。これはアメリカの一般の大学では見られない傾向である。

教員の部族大学観 施設の充実が急務であるという認識をすべての教員が示した。ことに教育学部、ビジネス学部は、キャンパスの教室も持たず、個人的住居を賃貸して授業が行われている。PC教室の充実、AV設置教室の拡充など、大学が設備面で取り組むべき課題は多い。またすべての教員が給料の低さを指摘した。

教員としてのモチベーション-物理的環境の劣悪さを指摘しながらも、非部族大学からのリクルートがあれば応じるという質問に、2名を除いてすべての教員が部族大学での就業継続の意志を示した。これは驚くべき「献身」を示すものだ。

卒業生インタビューは以下の人物に行った。ビジネス-ナターシャ・イーグル、トロイ・ランダーマン、カレン・リトル、ブレンダ・ボルドー、アイク・シュミット。教育-マイク・レノア、ケヴィン・デコラ、エリン・マコウスキー。ヒューマン・サービス-ミスコース・ペティ、ディアナ・ベアヒールズ、アン・ヴァランドラ。ラコタ・スタディーズ-ティナ・マルティネス。

インタビューから以下のことが明らかになった。

学生の出身家庭背景 両親が高校を卒業しているものが約6割、大学卒は1割、高校ドロップアウトが残り約3割で、両親の学歴は総じて高くない。約3分の2は、アルコール依存症、あるいは複数の結婚を繰り返す親をもち、いわゆる「機能不全家庭」の出身者であった。しかしその場合も祖父母の教育的献身が多く見られ、祖父母からラコタの精神的伝統を教えられたと答えるものが多かった。就学の困難さ 大学入学から休学せず卒業まで向かった学生は1名しかいなかった。休学の理由は、経済的逼迫、子育てが主である。ラコタ社会は低年齢出産が顕著で3名を除

いて女子卒業生は、入学時に子供がいるか入学中に産んでいる。男子学生も家族扶養のため休学を余儀なくされた。

学業継続、卒業達成の要因 さまざまな困難の中にあつて、祖父母や家族の励まし、またなによりも教師の励ましに勇気づけられた。卒業生の教師観 すべての卒業生が、公私にわたる教師の支援が学習継続を可能にしたと報告した。ある生徒は心がおれそうになったとき、教師がしっかりと彼女の手を握り、励ましてくれたことで、困難を乗り越えられたと涙ながらに語る。卒業生は教員の研究ばかりでなく人格に多大な尊敬の念を持つ。達成感 卒業、学位の取得から大きな達成感を得た。それまでの自信のなかった自分にたいする尊厳を感じている。職業人としてラコタ社会向上のために貢献したい。

総じて本調査(インタビューおよび卒業生の就業状況)から明らかになったのは、シンテグレシユカ部族大学が有為な人材を部族社会に輩出していることである。被験者は就活中の2名を除き、すべて部族関連(教員、カウンセラー、少年鑑別所、裁判所、病院等)の仕事についている。教員の献身、モラルサポートにより教員と学生は他のアメリカ社会では見られない顕著なラポールを構築し、それが生徒の学習継続を左右し、結果、有為な学生を部族社会に送り出すことに成功している。これら卒業生が問題の多い部族社会の向上、部族再生のための大きなエンジンとなっている。

文化再生に資する部族大学の活動実態も本調査で明らかになった。ことにシンテグレシユカ大学がスポンサーするノーザン・プレイン・インディアン・アート(先住民工芸品の展覧、販売会-保留地外のスーファオールで行われる)の年次開催は20年を超え、先住民の伝統工芸のアメリカ社会への発信、部族アーティストの育成、売上金の部族および大学への還流を促している。部族大学はラコタ・スピリチュアリティの象徴であるメディスンマンを、毎年恒例の大学設立記念日、パウワウ、卒業式に招いて儀式を行う。これら儀式に加えてキャンパスで行うスウェットロジの儀式は、コミュニティの成員に開かれている。大学のみならず保留地の小中学校で使うラコタ語の教科書およびカリキュラムの策定には、ラコタ学部が大きく関わっている。総じて部族大学がラコタ・アイデンティティを涵養するラコタ語の言語維持、ラコタ文化教育、文化再生に大きな役割を担っていることが検証できた。

(2)その成果の国内外における位置づけインパクト

特定の事例研究によって、高等教育機関が共同体再生、部族文化再生に大きな役割を果たしていることを検証した研究は日本国内でもアメリカでもない。部族大学が文化再生のエンジンモデルになりうるという成果は、学会への貢献のみならず、部族社会の向上の

観点から大きな社会的貢献になりうる。

(3)今後の展望

現在研究成果を書籍に纏めている。あらゆる面で調査に協力頂いたラコタ社会、シンテグレシユカ部族大学へ成果を還流させるため、英文で執筆し、University Press から出版すべく交渉中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

阿部珠理「ウォ・ラコタ アメリカ先住民社会における伝統の継承と実践」、『宗教研究』369号85巻2号(日本宗教学会)2011年9月、pp.237-264 査読あり

Juri Abe "Fighting a White Man's War: Participation and Representation of the Native American during WWII", 『立教アメリカン・スタディーズ』第33号、2011年3月、pp.129-145 査読あり

阿部珠理「アメリカ先住民の聖地と精神になぜ現代人は惹かれるのか」、『宗教と現代が分かる本』(平凡社)2011年3月、pp.185-193 査読なし

阿部珠理「ラコタ・スー族 伝統再生への道程」、『季刊民族学』33巻2号(千里文化財団)2009年、pp.51-66 査読なし

阿部珠理「アメリカ先住民の精神文化循環と調和の思想」、『世界平和研究』35巻2号(世界平和教授アカデミー)、2009年pp.18-27 査読なし

[学会発表](計6件)

阿部珠理 "アメリカ合衆国における「人種」と「エスニシティ」の再考"(同志社大学アメリカ研究夏期セミナー(於同志社大学))2013年7月27日

阿部珠理 "森の思想 アメリカ先住民の生態智"(拓殖大学生涯教育センター(於拓殖大学))2013年3月13日

阿部珠理 "アメリカ先住民文化復興の現在 ラコタ・スー族の事例を中心に"(第46回アメリカ学会年次大会(於名古屋大学))2012年6月3日

阿部珠理 "ラコタ・スー族 社会・経済開発への道程"(比較文明学会(西南大学))2011年12月24日

Juri Abe "Contributions of Scholarship in Time of Disaster" (American Studies Association 2011 Annual Conference in Baltimore) 2011年10月23日

Juri Abe "Fighting a White Man's War: Participation and Representation of the Native American during WWII" (第44回アメリカ学会年次大会(於大阪大学))2010年6月6日

[図書](計5件)

阿部珠理、他16名(編集代表および所収論文)「文明の未来-いま、あらためて比較文明の視点から」東海大学出版部、2014年、pp.318(76-92、305-314)

阿部珠理「聖なる木の下へ アメリカ・インディアンの魂を求めて」角川学芸出版、2014年、pp.222

阿部珠理、河東仁「夢と幻視の宗教史」リトン社、2013年、pp.404(197-222)

阿部珠理「アメリカ先住民から学ぶ その歴史と思想(NHKカルチャーラジオ・歴史再発見)」NHK出版、2011年、pp.184

阿部珠理「ともいきの思想」小学館、2010年、pp.254

6. 研究組織

(1)研究代表者

阿部 珠理 (ABE, Juri)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号: 50184213